

## 高校生、大学生にとって欠かせない日本語力

－「考えて、気づいて、伝える」プロセスの土台となる日本語力－

キャリアコンサルタント

川田 博美

インタビュー

キャリアコンサルタントとしてご活躍の川田博美先生に、高校生、大学生にとって日本語力を高めていくことがいかに大切なのか等についてお伺いしました。



### プロフィール

複数の職種を経験した後、IT関連の会社に勤務。社内外の教育及び、eラーニングコンテンツ、リファレンスブック作成等をはじめ複数のプロジェクトを経験するも家庭の事情で退職。その後、仕事復帰を目指しCDA（キャリア・デベロップメント・アドバイザー）の資格を取得する。

現在、キャリアコンサルタントとして活動の幅を広げ、現在、「NPO法人16歳の仕事塾」で都立高校対象にファシリテーターを担当。多くの高校生の未来を描くサポートを行う一方、東京工科大学等のキャリアアドバイザーとして、就職指導や講義を行う。また、社会人を対象として株式会社シグマスタッフによる平成26年度長期失業者等総合支援事業他、自治体のジョブカード面談、職業訓練講師、キャリアカウンセリングの実施、企業の採用業務等、その活動範囲は多岐にわたる。

### ■ 川田先生、現在のご活動を教えていただけませんか。

高校ではここ数年キャリア教育の必要性がうたわれています。この一貫として都立高校などでファシリテーターの立場から、高校生のキャリア形成のお手伝いをしています。高校生の興味や視野を広げ、自らの自信を高めると共に、「主体性」を育むことに留意しています。

大学では、就職に直結した講座の講師とキャリアアドバイザーとしてカウンセリングを行っています。講座は1回で完結するものではありますが、学生のキャリアを考慮し、学部単位のニーズに合わせる他、ガイダンス要素を持ち合わせた内容を中心に実施しています。カウンセリングでは、個々の学生との面談を通じて、個別の魅力を引出し、自信をもって就職活動に臨めるよう助言することが私の役割だと認識して対応しています。

社会人の方に対しては自治体事業に関連した再就職のための研修、またジョブカード面談を含む個別のカウンセリングを実施しています。研修では職業訓練校にて、IT関連や就労支援講座、ビジネスマナー講座等、就労準備をするための講座も担当しています。個別の面談では、過去のスキルから本人が輝けるスキルを探り当て、本人の環境を考えながら、より良い未来への方向性を見出すお手伝いをしています。

### ■ お話を伺っていると、学生、就職希望者を導くという、とても難しいお仕事ですね。

そうかもしれませんね。私も日々、皆さんから学んでいます。人はそれぞれに個性や特性があり、また、実は多くの経験をしていて、私から見ると輝けるいいものを持っているのです。でも、多くの方は、それに気づいてないのも現状です。私は会話を通じてそれを見出し、宝石の如く、原石を磨ききっかけとなるお手伝いができればと思っています。それには皆さんが自分自身で納得し、理解できないと本来の自分を知ることができません。ですから、私は皆さんが新しい「気づき」を得て、自己理解を深めてもらえるようにガイドをしています。

次ページへ続く 

■「気づき」とは、もう少し具体的にはどういうことなのでしょうか。また、気づくためには、どういう点が重要なのでしょうか。

そうですね。ここでいう「気づき」とは、新たな自分の側面を知ることです。また自分の生き方や在り方を発見することにも繋がっていると思います。働くということでは、自分にとって働くことの意味、つまり職業観を見出すことであり、それは自らの判断基準となる価値観を知る事にもなるでしょう。その価値観がしっかり把握できているのといないのとでは就職活動における結果の満足度も大きく変わります。

では、気づくためには、どうしたらよいのでしょうか。それは目の前の情報について、また経験した、体感したことについて、自分なりにどう捉えたのか、考え、整理することが大切です。そしてこのプロセスを繰り返し行うことで「考える力」が養われていくのです。さらには結果を言語として表現できることこそ、自らの意思としての意味をもつのではないのでしょうか。それこそが、今社会で求められている「伝える力」にも繋がるのだと思います。「考える力」を養うことは自らの日本語力を見つめる機会になることでしょう。

■やはり、日本語力が土台なのでしょうか。私たちも同様のことを感じることはあります。

「考えて、気づき、再度考え、そして人に伝える」というプロセスは、言語能力に影響されていると思われます。言葉の意味を理解しているからこそ、気づきや経験を適切に捉えることができ、自己理解へとつながるのではないのでしょうか。私たちは日本人ですから母語である日本語の力はとても大切です。多くの言葉を知る事で表現も広がり、あらゆる場面における人との関係でも生きてくるのです。その伝え方、表現方法により伝わり方も異なるでしょう。自分の意思や意図がより正確に伝わることこそ人とのつながりをより良いものに、さらには日本人として、その人自身の品格にも影響するものだと感じています。

多くの人の話に耳を傾け、また多くの正しい日本語に触れ、発信し、日本語力を日々磨いていくことは、人生を豊かにすることでもあるのです。

■今の高校生、大学生は、その日本語力は十分にあると思われますか。

SNS 等が発達した現在の社会では、実際に人と直接会話する機会が減ったのではないかと感じています。また手紙等、長い文章を書く機会も減り、文章を書くということについても年齢のわりに昔に比べ経験が少ない学生が増えました。そういう背景もあり、いざ就職や受験のための小論文を書く、また、卒業論文を書くという場面においてもその書き方自体がわからないという問い合わせもあるくらいです。世の中は便利になりましたが、この環境は、日本語力を育むという面ではマイナスなのではないかと思っています。

早い段階で、総合的に日本語力を測定できる日本語検定を活用し、まずは自分の日本語力を認識することもよいでしょう。日本人も意識して日本語を学んだ方がいい時代になったのだと感じています。そして日本語検定の問題は、社会人になってからも必ず役立つように作られていますね。自分の力を認識し、もう一つ上の級を目指すことで、社会が求める日本語力が育まれるでしょう。

■私たちが多くの高校生、大学生に、自分の日本語を意識して学んでほしいと思っています。さて、川田先生の今後のご活動、または何か目指しているものがあれば教えてください。

そうですね。これからはキャリアを自分自身で作る時代になっていくと思っています。だからこそ、将来的には自分自身で新しい仕事を作りたいですね。現時点では形はありませんが、これまでの経験を活かして、新しいことができたなら楽しいのではないかと考えています。

また、キャリア教育という観点からも言葉の問題は常に向き合うべき問題であると捉えています。私も日本語力を高めることがとても楽しいと感じているので、日本語検定の6領域をベースに、いずれ高校生、大学生、社会人に日本語を教えてみたいですね。

■川田先生、本日はお忙しいところ誠にありがとうございました。